

中高連携で、学びに連続性を持たせ 中高の指導改善につなげる

熊本県の公立高校の学区再編に伴い、県央の拠点校として設立された熊本県立宇土中学校・高校。高校教師による中学校での乗り入れ授業や、

「総合的な学習の時間」において中高6年間のプログラムを進める「宇土未来探究講座」など、中高が連携して生徒の学びに連続性を持たせ、生徒の力を最大限に伸ばす指導が行われている。

学区再編の影響による 成績上位層の流出が課題

旧制宇土中学校を前身とする熊本県立宇土中学校の敷地内に、熊本県立宇土中学校が開校し、県内初の併設型公立中高一貫教育校が誕生したのは2009年のことだ。この年、同県では公立高校の学区が再編されて従来の8学区から県北・県央・県南の3学区となり、宇土高校のある宇土市は、隣接する熊本市と同じ県央学区に組み込まれた。少子化に伴って同校への志願者も徐々に減り、さらに成績上位層の中学生が熊本市の

進学校に流出することが懸念される中、県の特徴ある学校・新しいタイプの学校づくりが進められ、同校は、地域の拠点校としての求心力を高めるべく、中高一貫教育校となった。

中学校は1学年2クラス、高校は外部進学の4クラスが加わり計6クラス。中進生（内進生）と高進生（外進生）は高校卒業まで別々のクラスで学び、2年次から、前者は文系コースとSSコース、後者は文系・理系・SSコースに分かれる。

教員組織は中学校籍・高校籍に分かれており、中学校から高校への教育の連続性を持たせるよう、異動を

進めている。

中学校の授業から受けた 驚きが、AI導入の契機に

中高連携の柱の1つとして進められているのが、高校籍の教師が中学校の授業も行う乗り入れ授業だ。中学校の全教科で、高校教師が授業の一部を受け持っている。乗り入れ授業の主なねらいは、高校教師が、中学校の指導内容や生徒の学習状況を把握するとともに、中高の授業改善につなげていくことにある。

例えば英語では、習熟度別に3クラスで展開している中学2・3年生

の授業に高校教師も入る。また、体育では、毎時間、中学校のすべての授業を中学校籍と高校籍の教師がチーム・ティーチング（以下、TT）で行う。乗り入れ授業の意義について、長く県立高校で指導し、同校では中学校の進路指導主事を務める橋本慎二先生は、次のように語る。

「乗り入れ授業を行うと、中学校での指導内容が分かるだけでなく、高校教師として中学生に教えておきたいと思うことを指導することもできます。また、教科ごとに行う授業研究会などでは、中学校教師も高校教師からよい刺激を受けています」



橋本慎二 はしもと・しんじ
熊本県立宇土中学校・高校
教職歴28年。同校に赴任して13年目。
中学部副主任。中学校1学年主任。
中学進路指導主事。



内田晴龍 うちだ・せいりょう
熊本県立宇土中学校・高校
教職歴28年。同校に赴任して8年
目。中学部主任。中学校2学年主任。
中学生徒指導主事。



後藤裕市 ごとう・ゆういち
熊本県立宇土中学校・高校
教職歴11年。同校に赴任して5年目。
研究開発部。SSH研究主任。「縁を
結び、新しい関係を創り出す教育を」



吉永晃紀 よしなが・こうき
熊本県立宇土中学校・高校
教職歴32年。同校に赴任して4年目。
研究開発部。GdL研究主任。「The
world is what you think it is」



高木和彦 たかき・かずひこ
熊本県立宇土中学校・高校
教職歴32年。同校に赴任して4年
目。進路指導主事。「生徒とともに、
創造性豊かに志高く切磋琢磨する」

理科では、13年度のSSHの指定を機に、中高の学習内容の融合を強化している。学校設定科目で設けた「未来科学」の授業は、中高の教師が共同で作成したシラバスで授業を進め、高校教師が中学校の授業にTとして入ることも多い。「中学校

の先生と共同で授業を行う中で、中学校と高校の違いをより明確に実感しました」と、SSH研究主任の後藤裕市先生は語る。

「中学校と高校の指導では、授業のつくり方や50分間の使い方など様々な面で違いがあります。また、高校1年生には伝わる説明の仕方でも、中学3年生には伝わらないこともあり、教え方の面でも違った工夫が必要です。特に驚いたのは、中学校では実験や活動の比重が非常に大きいことです。高校では講義型の授業が中心となるため、高校進学後に中学

熊本県立宇土中学校・高校

- ◎2009年に中学校を開校し、県内初の併設型公立中高一貫教育校となる。11年に文部科学省「中高生の科学部活動振興プログラム」、13年にSSHの指定を受ける。
- ◎設立 1921（大正10）年
- ◎形態 全日制・定時制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2016年度入試合格実績（現浪計）
国立大は、筑波大、東京大、名古屋大、広島大、九州大、熊本大、鹿児島大、熊本県立大などに83人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、同志社大、立命館大、関西学院大、西南学院大などに延べ272人が合格。
- ◎URL <http://sakurai.higo.ed.jp/sh/units/>

校の授業とのギャップを感じ、高校で理科が苦手となる生徒が増える理由を実感しました。中進生がスムーズに高校の理科に移行できるように、中学校での授業を踏まえて、高校の授業のあり方も変えていく必要があると感じています」

同校に赴任して以来、後藤先生の授業では、実験を通して考えさせたり、ワークシートを使ってペアワークをさせたりする機会を増やすなどの工夫をしているという。

英語科の吉永晃紀先生も、中学校の授業に影響を受けて、自身の授業を変えた。

「本校に赴任して、講義中心の授業から、プレゼンテーションソフトなどのICTを活用し、生徒が活動する授業に変えました。中学校の授業を実際に見る機会がなければ、自分の授業を変えようとは思わなかったでしょう」（吉永先生）

学習内容や授業方法だけでなく、生徒と教師の人間関係を築く上でも、高校教師が中学校で授業を行う意義はあると、吉永先生は語る。

「中学生が高校入学前に高校の教師と顔見知りになっておくことで、入学直後からスムーズに授業を進められます。生徒にとっては、中高のギャップを減らすことにもつながっています」

体験型の「宇土未来探究講座」で主体性や探究力を養う

中高が教育活動を連続させるよさを教師が最も実感しているのが、6年間を通した科学的探究活動を行うためのプログラム「宇土未来探究講座」だ（P.12図）。

中学校3年間の「宇土未来探究講座」では、自ら課題を発見し、目標に挑戦する姿勢を養うことをねらいとして、体験型プログラムを中心とした「野外活動」「地域学」「キャリア教育」を行う。著名な棋士を招き論理的思考力や大局観を養う「囲碁教室」（中学1～3年生）、他者とのかわりや自然の中で生活の基礎を学ぶ「御所浦わくわく島体験」（中学1年生）や「阿蘇自己再発見キャンプ」（中学2年生）、水と米とつり

竿だけを持って無人島で自給自足生活を行う「無人島サバイバル生活体験」(中学3年生)など、ユニークで多様な活動を、「総合的な学習の時間」(年間70時間)で行っている。

『宇土未来探究講座』のプログラムを作る時、常に念頭に置いているのは『いかに生徒を悩ませるか』ということです。本プログラムは、社会で生きる力の育成を主目的としていますが、ここで培われる、困難を乗り越える粘り強さやチャレンジ精神は、高校生活だけでなく、大学入試や大学生活でも必ず役に立つと信じています(橋本先生)

また、それぞれの活動を行う前にテーマを決めて調べ学習を行い、事後の報告会や発表会も実施している。その際、プレゼンテーションソフトや調査データを用いたプレゼンテーションスキルを学び、体験を言語化することで表現力を身につける機会が豊富に設けられている。

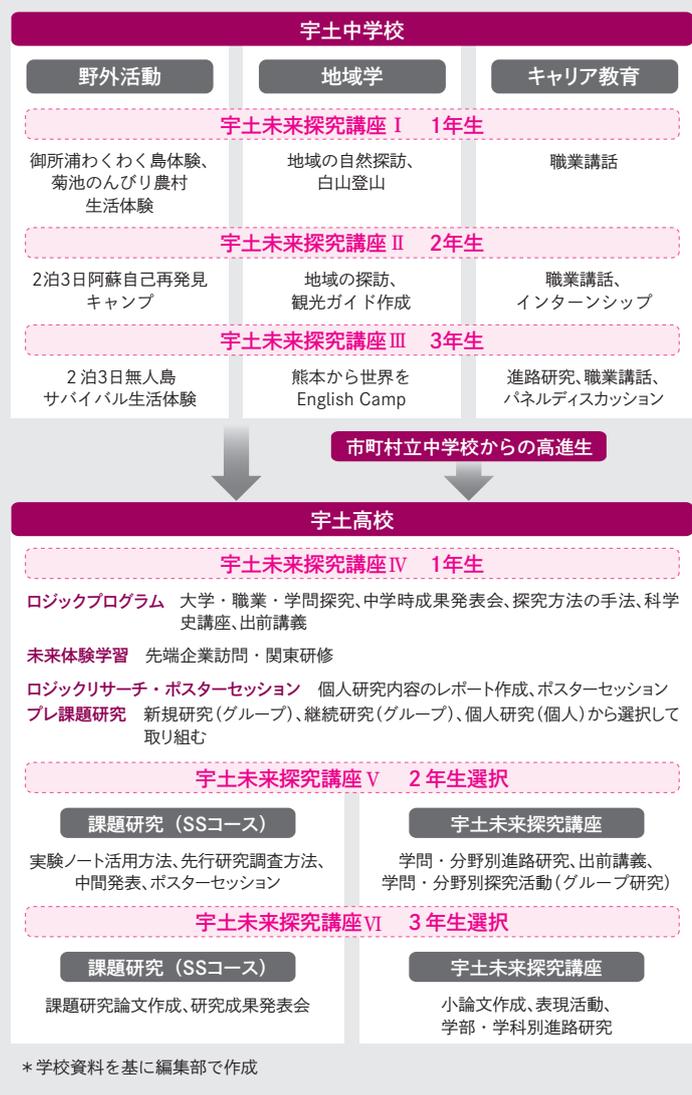
中学3年生の12月からは、3年間の集大成として「卒業論文」に取り組み。各自がテーマを決めて情報収集を行い、担当教師と相談しながら論文を作成し、3学期にポスター

セッションを行う。テーマ設定、情報収集、論文作成という、高校でも行う課題研究の流れを経験する。

こうした中学校での学習を受けて、高校の「宇土未来探究講座」では、さらに高度な内容で、グループによる課題研究に取り組む。1年次にブレ課題研究、2・3年次に本格的な研究を行い、海外研修や各種学会、コンテストへの出場などを旨とする。進路指導主事の高木和彦先生は次のように述べる。

「中学校の卒業論文で追究したテーマを高校の課題研究でも取り上げて学びを深めていく生徒もいます。そうした学びの継続性が持てるのも、中高連携のよさだと思っています」
「無人島サバイバル生活体験」では、中学生のグループに高校1年生がサポート役として1人ずつ入る。

「宇土未来探究講座」6年間のプログラム



事前にリーダーシップの研修を受けた高校1年生は、現地でも野外活動の専門家から指示の出し方などを学びつつ、中学生をリードする。実施後、「指導者側の大変さが分かった」といった声も多く、生徒のリーダーシップ力を高める場となっている。

中学校で培った力を土台に 高校では内容を深める

中学校時代に多様な活動を経験さ

せる指導を引き継ぎ、高校では自ら関心を持ったことに挑戦させ、より深い学びを追究させていく指導に努めていると、吉永先生は語る。

『トビタテ！留学JAPAN』(※1)など、国際交流関係のプログラムを紹介すると、真っ先に応募してくるのは中進生です。多様な体験を積み重ねてきたことで、新しい取り組みにも抵抗なく飛び込んでいくのでしょ。チャンスを生かし

※1 正式名称は、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」。2014年にスタートした官民協働で取り組む海外留学支援プロジェクト。高校生を対象とした「高校生コース」もある。

で自分の糧にしていく意欲を育む上で、『宇土未来探究講座』が果たす役割は大きいと思います」

後藤先生も、生徒の主体性を重視した指導を行っているという。

「私が実験テーマを示すだけで、生徒は自ら計画を立てて実験を行い、探究型学習を進めていきます。また、中学校での様々な活動経験から、身近なことに疑問を持つ力が培われており、課題研究でのテーマ設定も自分で進められます。そのため、高校の課題研究では、テーマ設定やプレゼンテーションに関する指導よりも、内容を深く掘り下げる指導に十分な時間を充てることができています」

このように、指導の効率化を実現できるのも、しっかりと中学校の取り組みに目を配っているからだ。高校籍の教師は、中学校の報告会や発表会にも参加し、生徒がどのような力を持っているのかを把握している。中学3年生が卒業論文のテーマを設定する際には、高校籍の教師も生徒と面談をし、より専門的な観点

からアドバイスをする。

「中学生の実態を把握することで、高校の課題研究においても中学校の成果を踏まえた指導を行うことができるのです」（後藤先生）

高進生もそうした中進生の姿に刺激を受け、自身の課題研究を深めていくという。異なる背景を持つ中進生と高進生が切磋琢磨し高め合う雰囲気も、探究活動の質の向上をもたらしているのである。

部活動も中高合同で行い 学校への求心力を高める

同校の課題の1つは、中学校からほかの高校に進学するケースが少なからずあることだ。現状では内進率95%を維持しているが、熊本市内の高校への進学希望者は毎年一定数いる。

「難関国公立大学や医学部への進学を希望する生徒は、進学実績の高い熊本市内の高校に惹かれる傾向にあります。本校としては、生徒個々への指導を手厚くし、進学実績を上げていくことで、求心力を高めていきたいと考えています」（高木先生）

そのために、生徒への日頃の声かけや面談にも力を入れている。

「ほかの高校への進学者が増える」と、『中高一貫の継続した教育』という本校の理念そのものが揺らぐため、ほかの高校への進学を考えている生徒には、できるだけ早い段階から面談などを行って対応しています。本校の理念を語るだけでなく、高校進学後に何をしたいのか、それは本校でも実現できるのではないかと、このことを再確認させ、宇土高校の魅力を理解してもらおうように努めています」（橋本先生）

部活動における中高連携も、内進率の安定につながっている。同校の陸上部やハンドボール部、吹奏楽部などでは、中高の生徒が合同で部活動を行っており、野球部も中学3年生の引退後から高校の硬式野球部に加わる。中学部主任の内田晴龍先生は次のように語る。

「顧問に代わって、高校生が中学生を指導する場面も少なくありません。普段無意識にしているバッテリーフォームなどを、中学生が理解

できるように言葉や体で表現する難しさを実感することも多い一方で、中学生への指導は高校生にとっても得るものが多いと思います。高校進学後も部活動を続けてもらいたいという思いもあり、優しく丁寧に中学生に接していることが、我々から見ても分かります」

もう1つの課題は、中高の教師の交流だ。同校では中高全体で1つの職員室とし、学年ごとに机を集めた配置とされているが、中高の学校文化の違いもあり、日常的な意見交換や情報共有をさらに活性化させていくことが課題だと、高木先生は言う。

「数学や理科、英語はSSHの取り組みを通して連携を深めており、その他の教科でも同様に中高の交流を進める必要があります。本校がさらに飛躍するためには、人事交流を活発に行い、中高の相乗効果を高めていくことが大切です。人的交流システムの構築、意見交換の場や時間の設定などの工夫で、中高6年間を通して『宇土で育てる』教育をさらに充実させていきたいと思っています」